



次の言葉



takashiishimoto

私がバス停に歩いていくと、珍しくミュキは先に着いていて、腕を組んボンヤリ前の方を見ていました。バス停とバス停をまたぐ大通りの向こうにはパチンコ屋があって、裏手の自転車置場には止められなかったのか、銀色の籠付き自転車が入口のはずれのところに、ポツンと一台放置してあります。日陰と日向の境目に後輪の泥除けがちょうど差しかかり、眩しく光っているのですが、ミュキはそんなあたりに目をやって立っていました。ミュキの着ていたワンピースの深緑の色使いが新鮮に見えて、膝上に切られた丈も決まっていて、とても似合っていたと思います。

「聡子遅い。あ、遅くないか。」

私が声を掛けると、ミュキは腕時計を見ないまま、

「家に誰もいなかったから早く来ちゃった。」

と、前髪を両手で引っ張った方に、両目を寄せて言いました。

「ミュキ、まただよ。お姉ちゃんとお母さんが喧嘩したの。『電話が長い、部屋が散らかってる、ステレオがうるさい、バイトばかりでやることやってんの、明日は自分で起きるのよ、ちっとも手伝わない、あなたまさか学校サボってんじゃないでしょうね、なんで今まで連絡しないの。』どっから話が始まってみんな出る。」

私は、バスがこれから来る方向に雲の間から差してきた陽を、目を細めて眺めながら話しました。

「お姉ちゃんのおかげで、聡子助かってんのよ。」

ミュキと二人でそんな話をしながらバスを待っていたのです。

今でも私はそのバス停からバスに乗って駅に向かい、東京の大学に通っています。この前の土曜日の午前11時頃、いつものように3限の授業に合わせてバスで駅に行く途中に、窓の外に久し振りにミュキを見つけました。それで中学1年生の時に、ミュキと最後に買物に行った時のことを思い出したのです。

大学に入ってから通学時間がとても長いので、その間中いろいろなことを考えます。塾で教えている生徒達のことや、大学での友達のこと、家族のこと、最近読んだ本や聴いた音楽、見たい映画。最近はそれを同じ塾で塾教師のアルバイトをしている斉藤君に話します。斉藤君に話す時、

「この前、バスの中で思ったんだけどさ、」とか、

「この前、バスの中で気付いたんだけど、」と言うのが癖のようになっていて、その人があまり喋らない人ということもあって、私がひとしきり喋ります。彼はその後で、「貸して、それ。」と言って、律儀に私が読んだ本や聴いた音楽のうち、興味を引いたものをチェックしています。

ガラガラのバスに乗り込むと、後ろの二人掛けの席に、ミユキを窓側にして座りました。中学生になって間もないその頃、ミユキは毎日ぼんやりしているように見えました。小学校6年の時にミユキが引越してきて同じクラスになり友達になったのですが、そんな風に思ったのはその頃からです。

バスが動いて、私が母と高校1年の姉との喧嘩の顛末を話していると、ミユキはまた窓の外を眺めて黙りがちになりました。学校の授業の話をして、先生の話をして、友達の話をして乗ってこないのも、私もなんとなく切り上げて、姉から無断で借りてきた「オリーブ」を膝の上に出して、ミユキの横顔と、さらに晴間が広がってきた窓の外の風景と、「オリーブ」の表紙を順番に眺めていました。朝のうちは曇りがちだったのですが、天気予報を聞いていたのか、高層マンションには、白いシーツが掛かった布団が干してあるのがだいぶ目につきました。しばらく駅に向かって走っていくとバス通りに面して、姉が当時通っていた県立N高校が見えてきます。外から詳しくは様子が伺えないのですが、その隣にはすぐ大きな墓園があって、辺りの雰囲気は、野球部やサッカー部やラグビー部が賑やかに練習しているグラウンドの風景と、くっきりと対比されているように感じます。殊にその日のような、雲の間から初夏を思わせる陽が段々と差し込んでくる時には、尚さらそんな風感じて、お昼前の時間に、近所のジャスコに行く幼児連れの母親や、部活へ行く途中の白いYシャツを着た二人組の男子中学生が、バスの窓を通して、やけにしんとした中を歩いているように見えたのです。

バスは高校の前の赤信号で止まって、私はしばらくそんな外の風景を眺めていました。ミユキは、グラウンドの端の方、通りに面している所に作られたテニスコートで練習している女子高生達を見ていて、やはり黙ったままでした。Tシャツやポロシャツに濃紺のジャージのズボンに合わせて練習している彼女達の二の腕や、みんな似たように後ろにまとめて前髪を付けた髪型や、いまひとつのストロークを見ていて、私は、

「ねえミユキ、あまりうまくない人もいるのね。」

と声を掛けてみました。ミユキは傾いた首を窓にもたせたまま、

「うん。」

と答えました。私はこの中にもお姉ちゃんの友達や、好きな人や、嫌いな人がいるのかもしれないな、とふと思いました。

「先生がいないからダレてるのかもね。」

と言ってから、私は「オリーブ」を見ながら、

「ミュキはテニス部おもしろい？」

と尋ねてみました。ミュキはそれには答えなくて、

「聡子も、真里も、よく続いているよね。私もか。」

と言いました。ミュキは私のほうをちょっと見て、その日初めて、少しだけフフッと笑いました。

高校前のバス停で、太めでショートヘアの女子高生が一人乗って、バスが動き出しました。私は「オリーブ」のページをめくって、ミュキにあれやこれや話しかけて、一緒にモデルや、モデルが来ている服の寸評を試みました。

ミュキが、たまにやるように、

「この人はきってお自分で何も言わないから、こんな髪型にされちゃったのよ。本当は気に入ってないのに。」

と、ふいに誰かをきつく批評したところで、

「それは、なかなかいいんじゃない？」

と、私は今日ミュキに会った時から気になっていた、深緑のワンピースのことを聞いてみました。

「これ、ママが去年買ったの。」

ミュキは私の膝の上から、自分の膝の上に「オリーブ」を移して、ページをめくりながら、

「ママが、ママの友達と買物に行った時に買ったの。それで去年の夏から目えつけて褒めてたんだよ、この服。それでこの前ママと一緒に買物行った時、『そういえば緑のワンピースはどうしたの？』って聞いたんだ。『まだ出してない。』って言われたから、『あたしが出したら、今度着てってもいい？』って聞いてよくなったの。だから2年がかりなの。」

ミュキは「オリーブ」から、伸ばした両足のつま先に視線を移しながらそう話して

、

「ミュキのお母さんはお洒落でいいな。私、お母さんの服なんか着たくないよ。」と私は答えました。

ミュキのお母さんは、その当時まだ若くて綺麗で、「大学の時の友達と買物行ったり、旅行に行ったりしてる。」と、ミュキはよく言っていました。ミュキのお母さんは、私が遊びに行くときくつきり愛想笑いをしてくれて、

「聡子ちゃん、ゆっくりしてってね。」と言って、飲物とお菓子を出してくれて、さっと隣の部屋に引っ込んで行きました。そして、その部屋からは、その頃流行っていた洋楽のアルバムが流れてくるのです。私はミュキのワンピースを見ながら、

「いいなあ、お姉ちゃんはおたまーに貸してくれることもあるけど、基本的に嫌がるからなあ、服貸すの」と言いました。

バスがトンネルを出てしばらく行くと国道にぶつかります。私達は当時いろいろな場所に作られたベッドタウンのひとつに住んでいて、まだその地域は開発されてから数年、といったところでした。そこに住む人々はそのトンネルを通り、車に乗って国道へ出たり、バスに乗って駅へ向かうのです。私達の前の席に座っていたおばさんが窓を数センチ開けたせいで、涼しい風が入ってきて、ミユキはその風を目を細めながら額で受けていました。

「この前さ、」

バスが国道を渡ろうとするところでミユキが私に話しかけました。

「この前さ、川村先生が走ってるの見たよ。」

川村先生は私達が入っていた軟式テニス部の顧問の女の先生で、おそらく当時はまだ20代後半の独身だったと思います。川村先生の国語の授業はあまり余計なことは喋らず淡々としていて、そんなに生徒に人気はありませんでした。中学校の先生には向いていなかったのかもしれませんが。私はミユキに「ふうん。」と、何の気もなく答えました。女子の軟式テニス部の練習を実際に見てくれたのは、男子を主に教えていた男の先生で、川村先生は形だけ付いていたようなものでしたが、だけど私達だって積極的にテニス部に入部した訳ではありません。ナブラチロワもクリス・エバートも知らないまま、「ラクそうで、楽しそうで、みんな入るところ。」っという理由で、ミユキや私や私の友達が入ったのです。だから私達が曲がりなりにもストローク出来るようになり、ボレーを覚え、サーブの格好がついてきたのは、英語の先生でもある堀田先生のおかげで、堀田先生は毎日男子テニス部の練習に筋道をつけると、「よし、じゃあちょっとやろうか。」と声を掛けながら寄って来て、「じゃあそこ、長山から林まではこっち側来て先生の隣側で受けて、大河内からその辺までは先生がこっちから打つから返して。」というように、全部で30人くらいいる女子のテニス部全員に指示を与えて、練習の形を整えてくれて、結局、私が入部してから卒業するまで、ずっとそんな形で教えてくれたし、試合の時も必ず付いてきてくれました。

「校庭の、向こうの端からこちらの端まで、すごい速さで走ってきて、走り終わると、またこっち側からあっち側まですごい速さで走っていくの。掃除の時間中に渡り廊下を歩いている時にグラウンドを見てみたら、野球部の人達がグラウンド整備してる奥の方で走っていて、全部で5往復してた。あんまり早いから野球部の人達も見たよ。本当、すごい速かった。」

「川村先生って足は早いんだ。」

「すごい速いよ。それで、その日はやっぱりテニスの練習には来なかったけどね。走り終わった後5分くらいはその場にしゃがみこんで下を向いて休んでて、それからスッと立って校舎の方に走って戻って来たの。」

「何やってたんだろう。」

「おととい、うちのクラスで国語があった時、野球部の男子がいきなり、『先生、足速いね。』って聞いたの。そしたら、『高校生の時までは速かったんだけどね。』って言うだけで、またすぐ授業始めちゃったの。」

ミュキはそう言うと、「オリーブ」のページを2枚、ペラッ、ペラッとめくりました。窓の外には駅の登りのホームにオレンジとグリーン2色使った東海道線の電車が止まっているのが見えます。

「行っちゃったね。」

ミュキは電車を見てそう言いました。

ミュキは夏休み中にテニス部をやめて、それからは段々一緒に遊ばなくなりました。2人で出掛けたのは中1のその日が最後です。横浜に行って洋服を買って帰ってきました。テニス部をやめてから、ミュキは友達も替わり、スカート丈を伸ばし、少し不良っぽくなって、私に会うと、「聡子元気？」と言った後、「じゃあね。」と振り向きながら言って、そのまま新しい仲間と向こうへ行ってしまうようになりました。けれど、私達は卒業まで、「聡子元気？」「うん。」「じゃあね。」は何度も何度も繰り返したのです。

川村先生は、私達が中学2年になった時にテニス部の顧問をやめたので、代わりに大学を卒業したばかりの新任の女の先生がやってきて、堀田先生と一緒に、割合熱心テニス部を教えてくれました。堀田先生と水島先生というその女の先生は、それからちょうど1年くらい経って結婚するのですが、私達は2人の結婚を知ったその頃、練習が終わり、あたりが暗くなったテニスコートで、「結婚って簡単にするんだね。」とよく話し合ったものです。

この前バスの窓から見たミュキは、ジーンズに紺のシャツを着て、ほんの少し色が抜けている髪は全て後ろに束ねられていて、軽くウェーブが付いていました。眉はきちんとカットされていて、美人で落ち着きのある印象を受けました。それは、中学校の頃のどこか無理があるように見えた上機嫌な感じや、何度か見かけた高校の頃の、カールした髪が傷んでいる様子とは変わっているように見えて、「ミュキ元気？」と心の中で声を掛けました。もしその時バスにミュキが乗り込んできたら、私達は久し振りに話をしたと思います。今何やっているのかとか（私はミュキが美容師を目指しているのは知ってましたが）、誰それは何やってるのかとか、もしかしたら最近興味を持っているものに共通点を見付けていたかもしれません。

その日の夜、自宅の近所にある、中学生のための学習塾でのアルバイトが終わっ

た後、私は自転車を、斉藤君は原付を押しながら近所のファミリーレストランへ歩いて行きました。斉藤君は2年前にこの近くに出来たK大学の新設学部の1年生で、この春に名古屋から出てきてアパートに1人暮らしをしています。こっちに来て早々の今年4月半ばには、ジャスコの貼紙でここの仕事を見つけてやってきました。

何人かいる大学生の塾講師の中で比較的小となしい私に安心したのか、最初のうちは、休憩中に飲むコーヒーはどこで入れてきて飲めばいいのかとか、この塾は結構前からあるのかとか、急用や病気で休まなければいけなくなったらどうしたらいいのかとか、分からないことがあるとポツポツと私に聞いていましたが、2ヶ月経った今では、経営者でもある30代後半の鶴田先生と阿部先生、それに私以外にも女性が1人に男性が4人いる大学生のアルバイトの先生達ともひと通り面識が出来て、段々と馴染んできたようです。

「今日駅へ行くバスに乗ってたら、中学校の時の同級生が窓の外を歩いてたの。」

「うん。」

「その子とはもうだいぶ話してないなあ、卒業してから。」

住宅街をカーブを描きながら取り囲む通りを、規則正しい間隔で街頭が照らしていて、飼犬の吠え合う声が遠くまで聞こえます。耳を澄ますと、下水管の音か、この地域の生活の音の集まりか、かすかな地鳴りのようなものを感じる気がしました。斉藤君はボサッと伸びたおかっぱの髪と、辺りの暗さのせいで表情が隠れていますが、明るい所にいる時も、目のすぐ上まで前髪がかかっているの、顔の表情よりも、不思議な落ち着きと照れが混じりあった全体の雰囲気の方が、斉藤君のニュアンスを表しているように見えるのです。

「仲が良かった友達なの？」と斉藤君が言いました。斉藤君の方がひとつ年下ですが、私達は最近タメ口で話します。

「小学校の時は。けど中学校に行ったら別れちゃった。」

しばらく黙って並んで歩き、コンビニの前を通り過ぎると、遠くに見える団地の灯りと街灯だけが辺りを照らしています。

「今度、買物に行こうか。」

斉藤君がそう言うと、私は何故か涙が出そうになりました。それから私は斉藤君に川村先生のことを話して、次の彼の言葉を待ちました。